



# 化け物丁場

ちょうば

## はじめに

全国各地に散在する伝説の一つに、「化け物杉」などと呼ばれる話があります。城などの柱として使用するため、または道路工事に邪魔だという理由などで、巨大な杉を切ろうとしますが、一夜のうちに斧で刈った木クズが切り口にくっついて、元にもどってしまおうという話です。杉のほかにも、栃や榎など、その土地土地でさまざまなに語られますが、共通するのは人々に畏れられるほどの大木だということ、気の遠くなるような年月を生き抜いた樹木には、人力が遠く及ばない神霊が宿ると考えられていたために、このような話が生れたのでしよう。

さて、実は建設工事の際にも、この「化け物杉」と同じように、理由はわからないのに土を掘っても掘っても元に戻ってしまう。また



十二哩七十鎮付近 「軽便鉄道 橋場線建設概要」より転載

は盛っても、盛っても崩れてしまう現場があり、「化け物丁場」などと呼ばれていました。

## 宮沢賢治の「化物丁場」

あの宮沢賢治も、このような現場を「化物丁場」という随筆風の短編で取り上げています。作中では賢治と思しき人物が、軽便鉄道に乗り合わせた鉄道工友から、軽便鉄道の「石・橋場間の「化物丁場」について聞かされますが、工友は「化物丁場」での出来事を「雨降ると崩れるんだ。さうだがらって水の為でもないんだ。全くをかしいです。」と表現し、鉄道レール敷設のために砂利盛りをした現場が、大した雨でなくても崩れてしまおうと思議がっています。このように化け物丁場と呼ばれた現場は、不可解な土砂崩れや、地盤隆起などが起きてしまうので、得体の知れない化け物の仕業のようだと考えられたことから名付けられたようです。

この話を聞いた賢治と思しき人物は、「私もその盛られた砂利をみんな

工ノ見ルベキモノアリ」という表現からは、一部難しい土工事があったように思えます。

このあたりの地質は、上半分が火山灰層、下半分が砂れき層であり、その間は水がたまりやすく、すべり面となったと考えられています。地質学が未発達な明治・大正時代では原因不明の現象として捉えられたようです。こうした化け物に苦しめられた現場は、この軽便鉄道のみならず、同時代には少なからず存在しました。

## 大河津分水の妖怪丁場

たとえば、度重なる洪水を防ぎ、越後平野を日本有数の穀倉地帯へと変えた大正時代のビッグプロジェクトである大河津分水路開削工事が、その一つに数えられます。

大河津分水路は、明治初年の第一次工事と大正年間の第二次工事を経て完成しました。第一次工事は、外国人技師の意見などから工事が行が技術的に疑問視されたため、明治8年に完成間近で中止となりましたが、『信濃川分水路沿革 明治四十二年五月稿』には、次の記述のように「化け物丁場」が存在したことが記されています。

「俗ニ称フル妖怪(バケモノ)丁場(人力ニ堪ヘサルヲ以テ妖怪の栖ム所トノ意ナラン)ノ如キ難工事アル

カ為ニ予算外多額ノ欠損アルヲ免レス」

## 山間部に棲む化け物

大河津分水路は、信濃川が日本海にもっとも近く大河津村(現在の燕市五千石)で、上流から押し寄せる洪水を日本海へと流すために開削された、全長約10kmの水路ですが、海側の約2kmには標高100mほどの山間部が横たわっていました。ここに棲む「人力ニ堪ヘサル」力を持つ化け物によって、掘っても掘っても地すべりが起きて、水路が埋められてしまったのです。第一次工事の際に起こった地すべりの規模はわかりませんが、第二次工事で起きた3回の地すべりは、圧倒的な量の土砂が工事を大きく手戻りさせました。

## 第二次工事での土砂崩れ

『信濃川開鑿工事工務報告 昭和二年』などによると、大正4年におきた1回目の地すべりでは、山間部の中央右岸が突如として崩壊し、移動土量約600万m<sup>3</sup>、その内すべり掘削工事を終えた地域には、東京ドーム約1杯分の約166万m<sup>3</sup>の土砂が流れ込み、幅約270m、高さ約36mの丘ができてしまいました。この事故処理で生じた手戻りは、工事に甚大な損害をもたらしました。そうして、ようやく土砂の撤去

作業が落着いたのもつかの間、大正8年にまたもや地すべりが起き、約360万m<sup>3</sup>の土砂が崩れ、掘削完了地区には約94万m<sup>3</sup>がなだれ込み、これら前後2回の地すべりによる処理土量は293万2千m<sup>3</sup>にも及びました。

この工事では、淀川改修工事で使われたエキスカベーターなどの大型掘削機械が流用されていました。それでもこれら地すべりによって工事全体の進行は、大きく妨げられることとなりました。

## 通水後の悪夢

そうした苦難を乗り越えて、大正11年に大河津分水は通水を開始しますが、なんとその2年後の大正13年にまたもや地すべりが発生し、約66万m<sup>3</sup>の土砂を処理するはめとなりました。しかし、すでに通水開始後であり、さらには緊縮財政のありを受けて、建設機械は解体撤去されていましたので、この膨大な土砂はすべて人力で撤去せざるをえませんでした。

しかも、昭和2年には洗掘による自在堰の陥没という有名な大事故がおき、土砂処理は遅々として進まなくなり、結局通水に支障がないとの判断で10万m<sup>3</sup>以上の土砂を残して、撤去作業を終えることとなったのです。

なが来てもまだいたづらに押しあてゐるすきとほった手のようなものを考へて、何だか気味が悪く思ひました。」と、賢治独特の想像力を働かせて不気味がっています。

## 橋場線の「化物丁場」

賢治の「化物丁場」は全くの創作ではなく、おそらく場面は大正11年7月30日のことで、工友が語ったのは、同月15日に開通したばかりの橋場線の「石・橋場間の工事現場だったのではないかと考えられています。

「軽便鉄道 橋場線建設概要」には、「本区間ハ雫石川ノ支流ナル龍川ニ沿ヒ概ネ平坦ナル田野ヲ通ズルヲ以テ工事容易ナルモ」としながらも、「十二哩七十鎮付近ハ山脚河流ニ突出セルト又橋場停車場付近ハ相当線路ノ高上ヲ要セシ爲メ共ニ多少土工ノ見ルベキモノアリ」とあり、「土

## おわりに

「化け物杉」の話では、木片を燃やすことによって、切り口がふさがらなくなり、大木を容易に切り倒すことができました。しかし土木工事の場合、なかなかそうはいかず、多量の土砂を処理するという手戻り作業は、人心を萎えさせ、膨大な月日や費用など工事に多大な損害をもたらしたのです。

大河津分水の化け物は、辛うじて人命を奪いませんでしたが、それは不幸中の幸いにすぎません。科学の発達した現代でも、自然の力のすべてを解明できたわけではなく、地の底、水の底には、まだまだ知られざる化け物が潜んでいるかもしれないのです。

(文：江口知秀)



大河津分水路工事の山間部で掘削中のエキスカベーター 信濃川大河津資料館提供